

2022年12月25日
宮崎中部教会クリスマス礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書9：1～6

ヨハネによる福音書3：16～21

「光が世に来た」

【前奏】

【招詞】イザヤ書60：1～2

【祈祷】

【聖書】イザヤ書9：1～6、ヨハネによる福音書3：16～21

【説教】「光が世に来た」

<クリスマスのお祝い>

クリスマスおめでとうございます。今日は、わたしたちの救い主であるイエスさまが、この世にお生まれになったことを、喜び、お祝いする日です。

このクリスマスの「おめでとう」というお祝いの言葉は、お生まれになったイエスさまに向かって、お誕生日おめでとう、と言っているわけではありません。

これは、わたしたちへ向けられた「おめでとう」です。あなたのために、救い主がお生まれになりました。おめでとう。あなたの罪を赦すために、イエスさまが与えられました。おめでとう。闇の中にいたあなたに、まことの光が与えられました。おめでとう。

クリスマスとは、罪の中にいるわたしたちを救うために、神さまが救い主として御子イエスさまを遣わして下さった、そのことを記念し、感謝し、礼拝をささげる日です。

ちなみに「クリスマス」という言葉は、クリスがキリスト、マスはミサ、礼拝のことを意味します。つまり、クリスマスは、キリストのミサ、「キリスト／救い主」を「礼拝」するという意味です。

クリスマスは、町中が楽しい雰囲気になり溢れて、お祭り騒ぎでお祝いしています。その多くの方は、イエスさまの誕生を祝う日、くらいには、思っているかも知れません。

でも、このクリスマスの本当の意味を知るならば。クリスマスが、わたしの救い、わたしの人生に関わることであると知るならば。それはただ、楽しいだけでは済みません。

わたしたちは、このクリスマスの出来事の意味を改めて知り、深く心に留めて、今日、ご一緒に心から、神さまへの礼拝を、クリスマスの礼拝を、ささげたいと思うのです。

<愛のために>

さて、今日読まれたヨハネによる福音書3：16は、クリスマスの意味を、最もよく表わしている御言葉であると思われまます。

この箇所は、ゴールデンテキストと呼ばれたりもします。また、宗教改革者のルターという人は、この小さなたった一節を「小さな聖書」とか、「小福音書」と呼びました。この一節に、聖書全体が語ろうとしていることが、ギュッと詰まっているからです。

3:16にはこうありました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

これこそが、クリスマスの意味、イエスさまがこの地上にお生まれになった理由です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

世というのは、わたしたちのことです。神の御子イエスさまがこの地上に遣わされ、お生まれになったのは、天の父なる神さまが、わたしたちを愛されたからです。

そしてそれは、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とありました。神さまは、愛するわたしたちが、滅びないために。愛するわたしたちが、永遠の命を得るために。独り子イエスさまを、この世に、わたしたちに、お与えになったのです。

<闇の中にいる>

しかしこれは、反対に考えると、独り子イエスさまが来られなかったら、わたしたちは滅びるはずであった。永遠の命を得られず、永遠に死ぬはずであった、ということです。

ヨハネによる福音書の3:19にはこうありました。「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。」

ここでイエスさまは「光」と言われています。つまり、イエスさまが来られるまで、わたしたちは光がない、真っ暗闇の中にいた、ということなのです。

わたしたちは皆、神さまに造られた者です。この命も、存在も、そして、この体で営む毎日の生活も、すべて神さまから与えられ、支えられ、守られて生きています。

神さまは、お造りになったわたしたちのことを、心から愛して下さり、必要なものを備え、いつも語りかけ、優しく眼差しを注いでくださっています。

ですから、神さまに造られた人間の本来の姿は、神さまと向き合って、神さまの呼びかけに答えて、神さまとの交わりの中で生きる。神さまを礼拝して生きる。それが、人間本来の在るべき姿なのです。神さまも、そのようにわたしたちが歩むことを、望んでおられます。

しかし、わたしたちは、その神さまの思いに背いて、与えられている恵みを忘れます。しかも、わたしたちのすべては、お造りになった神さまのものなのに、いつしか自分の命も、人生も、毎日も、時間も、勝手に自分のものにしていきます。神さま中心ではなく、自己中心的な歩みを。神さまの思いではなく、自分の思いに従う歩みをしています。

そうして、わたしたち人間は皆、本来の、神さまと向かい合い、神さまと共に在る姿を、失ってしまっているのです。神さまから、すっかり離れてしまっているのです。

これを、聖書は「罪」と言います。そして、この聖書の「罪」という言葉の本来の意味は、「的外れ」という意味なのです。

本来、わたしたちは神さまに向かっているべき存在なのに、的を外してしまっている。神さまの方を向かないで、あらぬ方向を向き、進むべき道を見失い、迷い、離れていってしまっている。それが、聖書が語る、わたしたちの「罪」です。わたしたちはみな、この「罪」に捕らわれてしまっているのです。

そして、それはまさに、闇の中にいるようなものなのです。神さまがどこにおられるか分からない。神さまの恵みも、何も見えない。進むべき方向も分からない。

そうであるならば、本当の自分の姿も見えないし、隣で苦しんだり、悲しんだりしている隣人のことも、わたしたちは、何も見えていないのでしょう。

わたしたちは、自らそのような闇の中に入って、すっかり道に迷ってしまっているのです。的を外して、神さまからどんどん離れて、悲惨な状態になっています。

わたしたちの命をお造りになったのは、神さまなのですから、その命の源であるお方から離れていくなら、わたしたちを待ち受けているのは、確かに、滅びしかないのです。

<滅びないように>

このように、神さまに背き、御言葉を無視し、恵みを忘れたのは、わたしたちの方です。わたしたちが、罪を犯し、神さまを悲しませ、また怒らせるようなことをしたのです。

わたしたちの闇は深く、またわたしたちの罪は、非常に深刻です。わたしたちは、自分の罪の償いを、どうやっても、自分の命を差し出したとしても、償いきることは出来ません。

しかし神さまは、わたしたちがそのまま滅びていくことを、良しとはなさいませんでした。神さまはそれでも、わたしたちを愛することを、お止めにはなりませんでした。

だから、父なる神さまは、ご自分の愛する御子イエスさまを、わたしたちの光として、わたしたちの救い主として、この世に送って下さったのです。

神の御子イエスさまが、まことの人となって、この世にお生まれになったのは。わたしたち人間のすべての罪を背負って、わたしたちが滅びる代わりに、この方が死んで下さるためでした。イエスさまは、わたしたちの罪を贖うために、わたしたちのために十字架で死ぬために、この世にお生まれになったのです。

クリスマスおめでとう。イエスさまがこの世に来られて、あなたのために死んで下さるゆえに、あなたは神と共に生きることが出来る。これが、クリスマスです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

ここに、「独り子を信じる者が一人も滅びないで」とありました。この「滅びる」という言葉は、聖書の他の箇所では、「失われる」とも訳される言葉です。

失われる。つまり、わたしたちが罪のために、闇の中に迷い出し、神さまから離れ、滅びていく、ということは。父なる神さまにとっては、ご自分の御許から、わたしたちが失われるということなのです。神さまが、わたしたちを失われる。

しかし、神さまは、わたしたちを失いたくない、と思われました。それほどまでに、わたしたちのことを愛し、一人一人をかけがえのない者として、大切に下さっているのです。

この「滅びる／失う」という言葉が使われている聖書箇所、有名なのは、ルカによる福音書の15章です。そこには三つのたとえ話があります。

一つは、100匹の羊のうち、一匹の羊を見失った人が、捜し回ってその一匹を見つける話。もう一つは、10枚の銀貨の一枚を失った女性が、それを捜しまわって見つける話。

そして三つめは、放蕩息子の父親の話です。この父親は、勝手に家を出て行って、財産を食いつぶし、放蕩の限りを尽くしている息子を、ずっと待ち続けます。やがて、息子が困って帰ってきたら、出て行って、走り寄って、抱きしめて、大喜びで迎えるのです。

そしてこの父親は、帰ってきた息子のために、祝宴を開いて、こう言うのです。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」。

神さまにとって、わたしたち一人一人は、失われたなら、見つかるまで捜し回る。そのためなら何でもする。そして見つかったなら、帰ってきたなら、大喜びして、祝の席を設けてしまう。それほどまでに大切な、愛すべき存在だということです。

神さまは、愛するわたしたちを失わないためなら、どのようなこともなさって下さるお方です。それは、ご自分の御子の命を与えて下さることさえも、惜しまれないほどなのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。(わたしたちを愛された。)独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(わたしたちが一人も失われなくて、神さまと共に、永遠に生きるためである。)」

<悔い改め>

闇を照らす、まことの光が与えられました。イエスさまこそ、闇の中にいるわたしたちに与えられた、たった一つの光。イエスさまこそ、神さまが、罪と滅びの中にいるわたしたちに与えて下さった、たった一つの、そして確かな、救いなのです。

ですからわたしたちは、救い主が与えられたこと知ったなら。光を与えられたと知ったなら。自分が、救い主を必要としている罪人であること。自分が、闇の中を歩む者であったこと。滅びへ向かい、失われようとしていたこと。そのことを知り、認めなければなりません。

そうして自分の罪を知ってはじめて、わたしたちは「悔い改め」へと導かれるのです。

悔い改めとは、失敗を悔いることや、ただ反省をすることではありません。

光によって、イエスさまによって、自分の罪、つまり、自分があらぬ方向を向いていたことを知り、その自分の心の向きを、はっきりと神さまの方向へと向け直すこと。罪から神さまの方へ、闇から光の方へと、はっきり方向転換をすること。それが、悔い改めです。

罪が、的を外すことなら、悔い改めは、ただしく的の方向へ向き直すことです。わたしたちの人生の方向を、神さまに定める。はっきりと神さまに向かう。光の方を向く。

そうして、わたしたちは、神さまから与えられたイエスさまの救いの恵みを、真正面からしっかりと、受け取ることが出来るのです。

もしそっぽを向いたままなら、大切な贈り物も、ちゃんと受け取ることは難しいのです。

<信じること>

また、今日の 16 節には、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とありました。

また、17～18 節には「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである」とありました。

ここに、「独り子を信じる者が一人も滅びないで」、また、「御子を信じる者は裁かれない」とあります。独り子を、御子を、信じる者。ここで、わたしたちは、救い主イエスさまを、信じる者になりなさいと、繰り返し招かれているのです。

「信じる」とは、イエスさまに救いをより頼むことです。イエスさまの十字架と復活の救いの御業が、このわたしの罪の赦しのためである、このわたしの救いである、と信じて、その救いを受け入れる、ということです。

わたしたちは、救いを信じなければなりません。差し出された救いを、受け取らなければなりません。

18 節には「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている」とあります。

これはつまり、神さまに差し出された救いを、受け取るなら、救われる。受け取らないなら、救われないということです。でもこれは、よく考えれば当たり前のことを言っています。

溺れているところに、救いの手が差し伸べられている。その手を信頼して握り返し、身を委ねるなら救われます。でも、その手を信頼しないで、振り払うなら、どうなるでしょうか。

だから、その差し出された手を信じて、握り返しなさい。そう言われているのです。

…救いが与えられたなら、それを受け取るか、受け取らないか。闇の中に光が来たなら、そこに行くか、行かないか。そのどちらかしかありません。

イエスさまが来られたということ、救いがわたしたちに与えられたということは、それを目の前にしたわたしたちが、どうするかを迫ります。

そして、それは結果的に、光に来る者と、闇に留まる者とを、分けることになるのです。

独り子を信じる者が、一人も滅びないで、永遠の命を得るのです。だから、イエスさまを信じなさい。あなたを救う神さまの愛を、その御力を、信じなさい。すべて差し出されているのだから、あなたはただ、その救いを受け取りなさい。そう、言われているのです。

<真理を行う>

最後に、今日の御言葉の 21 節には、「真理を行う者は光の方に来る」とありました。

この「真理を行う」とは、わたしたちが良い行いをするとか、正しい行いをすると、という意味ではありません。

古代の神学者は、ここで言う「真理を行う」とは、「わたしたちがどんなに惨めで、善を行う力がないかを認知することである」と言いました。自分が、罪に対して本当に無力であること、弱い者であること、貧しい者であること。そのことを痛いほどに思い知らされて、ただ神さまの恵みに寄り頼むしかないと知ることが、真理を行う、ということなのです。

だから、真理を行う者は、光の方に来る。それは、自分の罪を、無力さを知っているから、神さまに救いを求めるしかない、ということです。

そうして、わたしたちが神さまに救いを求めたとき。わたしたちは、神さまが、すでに全力で、力を尽くして、わたしを救うために、あらゆることをして下さったと知るので。

父なる神さまは、イエスさまを通して、わたしたちにはっきりご自分の愛を示し、またわたしたちを救うためにならどのようなことも、御子が十字架に架かって死ぬことさえも出来るのだと、示されました。神さまは、信じるに足るお方です。この方が言われるのです。

愛するあなたたちを、一人も失いたくない。あなたを、絶対に失いたくない。

わたしたちは、この神さまの愛を、信じてよいのです。そして、イエスさまによって差し出された救いを、神さまと共に生きる永遠の命を、喜んで、受け取りたいのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

イエスさまがお生まれになり、神さまの愛が、わたしたちに示されたクリスマスです。

わたしたちは、心からの悔い改めと感謝をもって、神さまからの贈り物を受け取り、キリストのミサ、心からのクリスマスの礼拝を、共におささげいたしましょう。

【お祈り】

天の父なる神さま クリスマス、あなたの独り子イエスさまを、わたしたちに与えて下さり、ありがとうございます。それほどまでに、わたしたちを愛して下さり、ありがとうございます。わたしたちに罪の赦しを与えて下さり、わたしたちがあなたの御許に帰ることを喜んで下さり、ありがとうございます。

神さまが与えて下さった愛を、救いの恵みを、イエスさまを、わたしたち一人一人が、自分のための贈り物として、感謝して、大切に、受け取ることが出来ますように。

救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 261 「もろびとこぞりて」

【信仰告白】使徒信条

【聖餐】

【讚美歌】 73 「主よ、平和のうちに」

【献金】【主の祈り】

【讚美歌】 25 「父、子、聖霊に」

【祝福】主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン